

令和7年度「高校生ステップアップ・プログラム」 実 施 報 告 書

1 「高校生ステップアップ・プログラム」とは P 1

2 各指定校の取組（17校）

空知	（1）北海道栗山高等学校	P 2
石狩	（2）北海道札幌東高等学校	P 3
	（3）北海道札幌南高等学校（定時制）	P 4
	（4）北海道札幌北高等学校（定時制）	P 5
	（5）北海道札幌厚別高等学校	P 6
	（6）北海道札幌白陵高等学校	P 7
	（7）北海道江別高等学校	P 8
	（8）北海道有朋高等学校（定時制）	P 9
後志	（9）北海道蘭越高等学校	P 10
胆振	（10）北海道追分高等学校	P 11
	（11）北海道鶴川高等学校	P 12
	（12）北海道白老東高等学校	P 13
渡島	（13）北海道南茅部高等学校	P 14
上川	（14）北海道富良野高等学校	P 15
宗谷	（15）北海道枝幸高等学校	P 16
	（16）北海道礼文高等学校	P 17
オホーツク	（17）北海道雄武高等学校	P 18

3 高校生ステップアップ・プログラム実施要項 P 19

北 海 道 教 育 委 員 会

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

1 趣旨

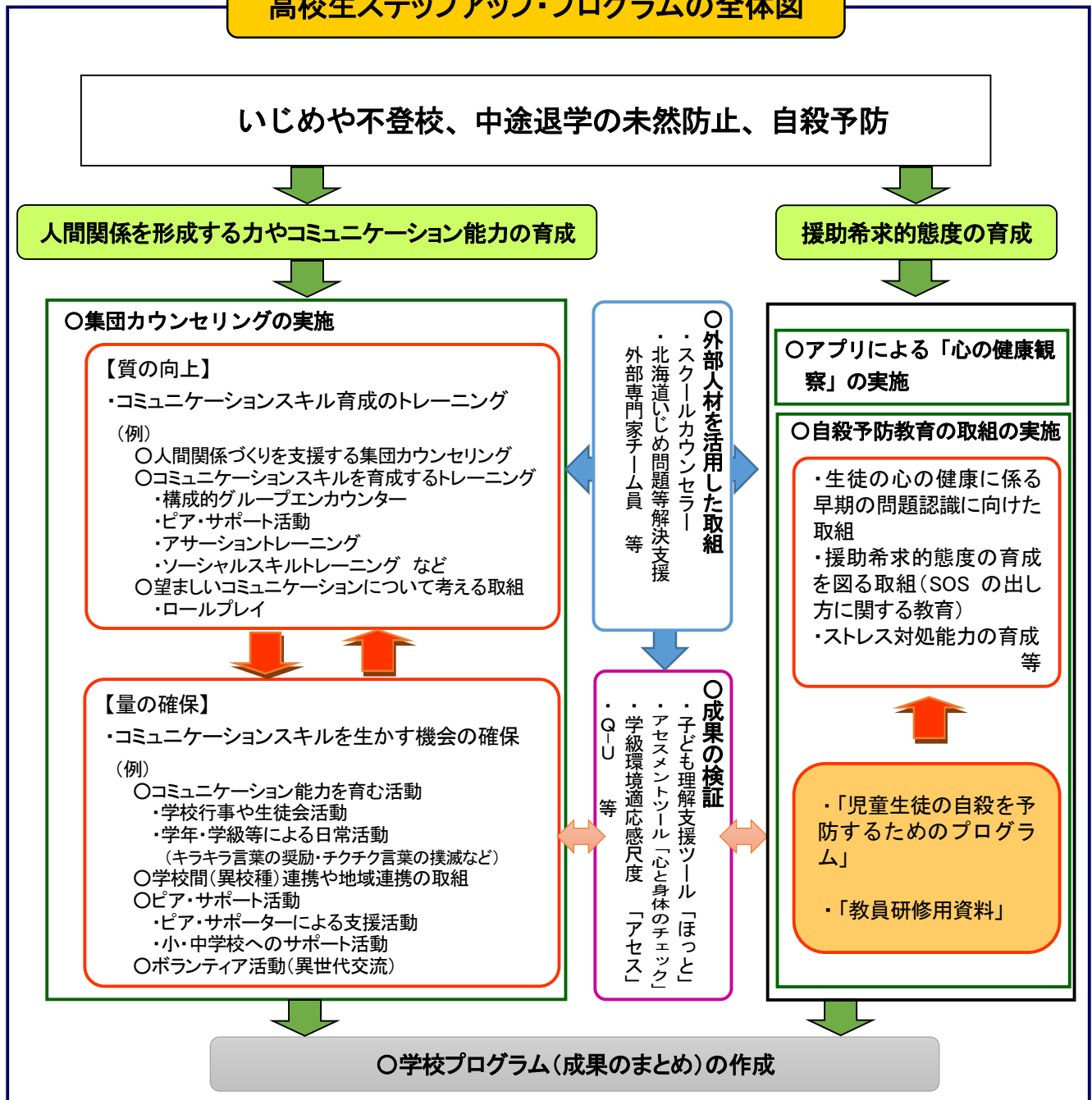
高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業内容

- (1) 集団カウンセリングの実施
- (2) 自殺予防教育の取組の実施
- (3) アプリによる「心の健康観察」の実施
- (4) 外部人材を活用した取組の実施
- (5) 成果の検証
- (6) 学校プログラムの作成

高校生ステップアップ・プログラムの全体図



北海道栗山高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：130名

本校の目指す生徒像

- ・主体的に知性を磨き、豊かな情操を身に付ける生徒
- ・豊かな自然に親しみ、強固な心身を鍛えていく生徒
- ・勤労を愛し、奉仕の精神を持ち社会貢献できる生徒

本校の現状

素直で人懐っこい生徒が多く、教職員と生徒との距離が近い。一方でコミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒も見られる。

本校の取組の特徴

- 1 教育相談週間の設定と子ども理解支援ツール「ほっと」の活用
- 2 スクールカウンセラーや外部講師による講演・集団カウンセリング
- 3 アセスメントツールの活用

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 教育相談週間の設定と子ども理解支援ツール「ほっと」の活用

4月と12月に教育相談週間を設定し、全生徒との面談を実施した。また、教育相談週間に合わせて、「ほっと」を実施し、その結果を面談の一資料として活用するなど、多面から生徒の日常の不安や悩み等を把握することに努めた。

2 スクールカウンセラーや外部講師による講演・集団カウンセリング

(1) スクールカウンセラーによる講演・集団カウンセリング

全校生徒を対象にストレス対処の方法や援助希求的態度等の重要性についての講演を実施するとともに、生徒の状況に応じ、各学年2時間ずつ集団カウンセリングを実施。

(講演内容：コミュニケーションの取り方、自己理解と他者理解)

(2) 外部講師による講演（1学年）

自他ともに認め合う人間関係について学ぶことを目的に、栗山町の保健師による性の多様性やデートDVについての講演を実施。

(3) 北海道医療大学富家教授による講演

「アサーション」をテーマに自分も相手も尊重するコミュニケーションの取り方について講演を実施。

(4) 心のライブ授業

外部講師（北海道いのちの電話事務局長・ミュージシャン）を招いて、命の大切さを伝える講演や演奏会を実施。

3 アセスメントツールの活用

「ほっと」の他、「ほっとプラス」「メンタルヘルスアンケート」を実施し、富家教授に分析を依頼。結果を生徒支援に活用。



【集団カウンセリングの様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・年2回の教育相談週間を設定することで、生徒にとって相談しやすい環境を整えた。なお、教師にとっては生徒理解を深める機会となった。
- ・スクールカウンセラーや外部講師等、専門家からの講演・集団カウンセリングを通して、自分が持つリソース、ストレス、不安等とうまく付き合う方法や、お互いを尊重するコミュニケーションの大切さについて理解を深めることができた。

○ 課題

日常的な場面では、まだまだコミュニケーション不足の場面も見られる。日常のあらゆる場面で気付きを与え、経験を積み重ねる取組が必要である。

○ 次年度に向けて

学校や地域の特性を生かし、教科の枠にとらわれることなく、教科等横断的に生徒のコミュニケーションや自己肯定感の向上を目指した取組を継続していく。

北海道札幌東高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：937名

本校の目指す生徒像

「関わる力」、「見通す力」、「やり抜く力」、「かなえる力」を身に付ける生徒

本校の現状

非常に真面目で一生懸命であるが、悩みを抱えている生徒が多い。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによるワークショップの実施
- 2 スクールカウンセラーを活用した、きめ細かな支援

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 スクールカウンセラーによるワークショップの実施

望ましい人間関係や自己肯定感を高める「集団作りエクササイズ」の実施

＜集団作りエクササイズの内容＞

- ・構成的グループエンカウンター
- ・ソーシャルスキルトレーニング

2 スクールカウンセラーを活用した、きめ細かな支援（必要に応じた外部機関とのスピーディな連携）

- (1) スクールカウンセラーによる面談
- (2) スクールカウンセラーによる講話等の実施
- (3) 教育相談室の積極的活用
- (4) 非認知機能を図るアンケートの実施、分析



【ワークショップの様子】



【ワークショップの様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・「集団作りエクササイズ」では、ゲームやミニワークを通じて生徒間で自然に会話が生まれ、互いを理解し合う貴重な機会となった。
- ・入学後すぐにソーシャルスキルトレーニング等を実施したことにより、早期に人間関係が安定し、スムーズに学校生活を開始することができた。
- ・生徒からは、「自己理解、他者理解を深められた」、「自己開示能力が高まったため不安が解消された」等のアンケート結果が見られた。

○ 課題

多様な悩みを抱えている生徒が増加しており、アセスメントの時期や取り組み方など工夫が必要である。

○ 次年度に向けて

スクールカウンセラーや外部講師による研修を実施するなど生徒の状況に応じた適切な対応ができるよう研鑽を深めていく。

北海道札幌南高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：75名

本校の目指す生徒像

- ・ 勤労と学業を両立できる強固な意志と逞しい体力を持つ生徒
- ・ 時代の進展に対応できる能力を持つ生徒
- ・ 社会の発展に貢献できる調和のとれた人格を持つ生徒

本校の現状

自己肯定感を高め自律的に行動できる主体性や他者と関わり互いに高め合う社会性の獲得が必要。

本校の取組の特徴

- 1 外部機関と連携し、対人関係スキル学習会の実施を通じた対人関係形成能力向上の取組
- 2 大学教授やスクールカウンセラー（以下ＳＣ）による教員研修を通じた教職員の資質能力向上への取組
- 3 道内外の特別支援教育先進地域への学校視察訪問とその共有による教職員の知見の向上

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- 1 外部機関と連携し、対人関係スキル学習会の実施を通じた対人関係形成能力向上の取組
養護教諭によるコミュニケーション教室や、ＳＣによるこころの健康教室、人権擁護委員によるデートＤＶ教室などを通して、対人関係形成能力を主体的に伸ばすきっかけとした。
- 2 大学教授やＳＣによる教員研修を通じた教職員の資質能力向上への取組
北海道教育大札幌校の教授によるカウンセリングに係る事例研究会を８月に実施し、具体的な事例をもとに、生徒への支援への手立てを協議した。また、ＳＣによる今年度の生徒へのカウンセリング内容を踏まえた教職員向け研修を１１月に実施し、生徒理解に役立てた。
- 3 道内外の特別支援教育先進地域への学校視察訪問とその共有による教職員の知見の向上
道内２校、道外３校への学校視察訪問を９～１０月に実施、特別支援教育に関わる意識・知見の向上に努めた。得られた情報を校内研修で共有、先進地域と本校の違いを把握するとともに改善点の洗い出しを図った。

取組の成果等

○ 成果

- ・ 「対人関係スキル学習会」では、生徒から「何事にも自分を理解し、自分の感情を認めることが大事だと思った」という声があがるなど、自身の悩みや対人関係トラブルが成長の過程で起こり得るものであることを自覚する生徒が多く見られた。その自覚から、援助希求的態度の促進につなげることができた。
- ・ さらに、校内研修や学校視察による事例の共有を通して、特別支援教育に係る新たな知見を教職員が獲得することができた。

○ 課題

多様な背景を抱えながら援助希求的態度がとれず孤立しがちな生徒に対して、生徒の主体的な活動を伴走支援する教職員の協働体制を構築する必要がある。

○ 次年度に向けて

生徒がＳＯＳを出しやすい環境の整備及び特別支援教育に関する教職員の研修体制の充実を図る。

北海道札幌北高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：90名

本校の目指す生徒像

- ・広く学び、深く考え、自ら行動することができる生徒
- ・人を人として尊重し、豊かな心を持った生徒
- ・前を向き、挑戦し、未来を切り拓くことができる生徒

本校の現状

- ・コミュニケーション能力と社会性の育成が必要
- ・心の健康の充実に向けた校内外の環境整備をしていく
- ・特別支援教育に関する教職員のさらなるスキルアップ

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーや外部講師による講話等
- 2 スクールカウンセラーによる支援
- 3 アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施

取組の内容

○ 自殺予防教育の取組

1 スクールカウンセラーや外部講師による講話等

- (1) スクールカウンセラーによる講話
 - ・「心の授業～良いコミュニケーションのコツ～」(援助希求的態度の育成)
 - ・「心の授業～命の危機・『自殺』を防ぐために～」(早期の問題認識(心の健康))
- (2) 北海道いのちの電話相談員による「こころのライブ授業(いのちの大切さ、心の健康)」の実施
- (3) こども家庭庁主催「こどもの自殺対策の推進に向けたワークショップ(悩んでいる友人のサポート)」の実施

※上記の他に、保健体育科の授業で「精神の健康」(ストレス対処能力の育成、心の健康)実施

2 スクールカウンセラーによる支援

1年間を通して、生徒や保護者を対象とした個別のカウンセリングを実施。積極的にケース会議やコンサルテーションを実施した。

3 アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施

結果は特別支援委員会で分析し、要支援の生徒に対して担任による面談を実施した。また、必要に応じて継続的な支援について特別支援委員会で検討し組織的対応につなげた。

取組の成果等

○ 成果

スクールカウンセラーの講話等により、教職員以外にもいつでも相談ができる大人として、本校にもスクールカウンセラーがいることを理解させることができた。また、外部講師を活用することで「危機介入スキルの習得」、「悩んでいる人のサインに気づき」、「声をかけるゲートキーパーとしての資質の育成」ができ、組織全体のセーフティネットが強化された。

○ 課題

今後も、生徒の課題に即した特別支援教育・合理的配慮の実践に向け、スキルアップを図るための研修が必要である。

○ 次年度に向けて

本年度実施した取組を継続するとともに、入学時の予防教育に重点を置き、1学年を中心にスクールカウンセラーを活用した講話や担任による面談を計画的に実施する。

北海道札幌厚別高等学校

課 程：全日制
学 科：総合学科
生徒数：828 名

本校の目指す生徒像

- ・ 自律的な行動がとれる生徒
- ・ 豊かに逞しく生きることができる生徒
- ・ 協働して新たな価値を創造しようとする生徒

本校の現状

SNSトラブルが増加するなど、相手の立場や気持ちを踏まえて適切に関わり、円滑な人間関係を形成する力の育成に課題が見られる状況となっている。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによるコミュニケーションワークショップ
- 2 生徒面談週間を通じた生徒理解と生徒支援の体制づくり
- 3 自殺予防など、自分を大切にする取組

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 スクールカウンセラーによるコミュニケーションワークショップ

4月の新入生およびクラス替え直後の2年次生を対象に、北海道演劇財団が提供するプログラムを活用し、身体表現や対話を取り入れた活動を通じて、互いを理解し合い、安心して関わるのできる人間関係の構築を目的にしたコミュニケーションワークショップを実施した。

2 生徒面談週間を通じた生徒理解と生徒支援の体制づくり

生徒面談週間においては、アセスの結果を効果的に活用し、生徒の心理的状況や対人関係の傾向を踏まえた面談を実施した。全教職員が面談に関わり、得られた情報を入力・共有することで、組織的かつ継続的な生徒支援につなげている。また、2月には北海道大学から准教授を招き、精神疾患や発達障害への理解と具体的な対応を学ぶ「心のサポーター」研修を教職員向けに実施し、専門的知見の向上を図った。

○ 自殺予防教育の取組

3 自殺予防など、自分を大切にする取組

北海道いのちの電話事務局より講師を招き、「こころのライブ授業」を実施した。講師によるメッセージや歌唱を通して、「今のままの自分でいい」という前向きな感想が多く寄せられるなど、生徒が自分自身の存在や命の大切さを見つめ直す機会となった。

取組の成果等

○ 成果

生活面談週間等の機会を通じて教職員間での情報共有が進み、生徒の小さな変化にも早期に気付く体制が整いつつある。これにより、教職員が連携した生徒理解と継続的な支援につなげる動きが見られるようになった。

○ 課題

人間関係形成に向けた様々な取組を実施してきたが、分掌間で連携した取組が十分とは言えず、取組内容を相互に関連付けた連続的・効果的な実践には至らなかった。今後は、各取組の目的や成果を共有しながら、年間を通じて体系的に実施できるよう、分掌間の連携の在り方をさらに工夫していく必要がある。

○ 次年度に向けて

目指す生徒像について教職員間での共有を一層進めるとともに、外部人材の効果的な活用と実践を支える分掌間の連携強化を図る。また、各取組の目的や年間計画を整理し、行事の精選を進めることで、連続性と効果を意識した取組の充実を図る。

北海道札幌白陵高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：143 名

本校の目指す生徒像

- ・感謝の心を持ち、社会に貢献する生徒
- ・自ら進んで視野を広げ、知性を磨く生徒
- ・心身を鍛え、たくましく生きる生徒

本校の現状

- ・生徒一人ひとりが自己理解や他者理解を深め、自他の命の尊さや価値を再認識する必要がある。
- ・生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

本校の取組の特徴

- 1 外部講師の講演による「命」の大切さの再認識、自己理解及び他者理解の深化
- 2 外部講師によるコミュニケーショントレーニングを通した、コミュニケーション能力の育成や自己肯定感の醸成
- 3 スクールカウンセラーや外部機関との連携によるきめ細かな生徒理解と専門性の高い生徒支援

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 外部講師の講演による「命」の大切さの再認識、自己理解及び他者理解の深化

講演「命の大切さ」 講師：助産師 吉田 征子 氏

【講演内容】

人と人との関わりはどうあるべきか（コミュニケーションの取り方）、援助希求の重要性、男女交際の在り方・デートDV、情報選択の方法、男女の心の違いと体の仕組み、LGBTQ、妊娠・出産・中絶、性的同意、いのちの誕生、等

2 外部講師によるコミュニケーショントレーニングを通した、コミュニケーション能力の育成や自己肯定感の醸成

講師：ネイパル深川 社会教育主事 谷川 洋史 氏 、指導員 坪田 雄登 氏

【内容】

生徒相互の信頼関係の構築にむけたコミュニケーション力、表現力の育成、自分自身を高めるための「自己肯定感」の醸成、クラスの集団としての「協調性」や「他者への思いやり」の心の醸成、教員と生徒の相互理解 等

3 スクールカウンセラーや外部機関との連携によるきめ細かな生徒理解と専門性の高い生徒支援

【内容】

生徒及び保護者に対するスクールカウンセラーの個別継続的なカウンセリングの実施、併設校である白桜高等学園との連携（パートナーティーチャーによる特性のある生徒への支援、白桜高等学園の研修への参加等）、通級指導等について先進的に取り組んでいる札幌琴似工業高等学校（定時制）との連携、ヤングケアラー等の問題を抱える生徒のための相談先との連携、特性のある生徒の進路先等を見据えての相談事業所との連携 等

取組の成果等

○ 成果

講演や実践的なトレーニングにより、正しい知識を身に付け、自他の理解を深め、多様性を認め合う意識を向上させることができた。

○ 課題

知識や理解を日常の行動へつなげるため、継続的な取組について検討する必要がある。

○ 次年度に向けて

持続可能な取組とするために必要な視点や内容を整理し、学校全体で共有する。

北海道江別高等学校

課 程：全日制

学 科：普通科・事務情報科・生活デザイン科

生徒数：777名

本校の目指す生徒像

常に前向きで何事にも粘り強く取り組み、多くのことに疑問を持ち考え抜き、自らの正しい判断をする力と他を思いやることができる生徒。

本校の現状

おとなしく素直な生徒が大多数である。対人関係において、周囲への配慮から自己開示することに消極的な生徒が見受けられる。

本校の取組の特徴

- 1 コミュニケーショントレーニングの実施
- 2 ピア・サポート研修会の実施
- 3 スクールカウンセラーによる教職員向け研修会の実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 コミュニケーショントレーニングの実施

入学当初に生徒間の良好な関係を築くことで、相談しやすい関係性のある学年・学級づくりを目指した。また、S G EやS S Tの手法を活用するなど、自己表現力やコミュニケーション能力を高める体験的な活動を通し、悩みなどを互いに相談し合うような望ましい人間関係の構築に向けた態度や能力を身に付けることができた。参加した生徒からは「話したことのない人と関わることができてよかった。」「他人の意見を聞き、自分では感じない様々な意見が出てきて、様々な視点で気付けることがあった。」などの感想があり、多くの人とコミュニケーションを図り、良好な人間関係を築くためにはどのように行動すべきであるか、改めて考える機会となった。

2 ピア・サポート研修会の実施

自己理解および他者理解を深めつつ、自己開示能力の育成をねらいとし、保健局員と有志の生徒で自己開示を意識するためのアサーショントレーニングを実施した。

「自己理解と他者理解」というテーマでは、他者に対する苦手意識や、好ましいと思う人物像について考えた。また、教員によるロールプレイングを披露した後には、「相手の顔を見たり相槌をしないと、相手に興味が無いように思えて、話す側が話しにくいと思った」などの感想が寄せられた。



【ピア・サポート研修会の様子】

3 スクールカウンセラーによる教職員向け研修会の実施

発達障害のある生徒の「コミュニケーション」「感情の理解」の背景にある「ものの見方・考え方」を把握することで、生徒理解を深めた。

取組の成果等

○ 成果

コミュニケーショントレーニングやピア・サポート研修を実施することで、参加した生徒の大多数に、他人の気持ちを考えたり想像したりする態度が育まれ、他者理解に向けて積極的に行動する場面が見られるなど、明らかな変容が見られた。

○ 課題

より効果的な研修とするため、研修の実施時期や内容を精選する必要がある。また、より多くの生徒にピア・サポートに触れる機会を設定するためにも、個別に声かけをする必要がある。

○ 次年度に向けて

学年や分掌の横断的な協力体制の構築や教員間における意思疎通の緊密化および生徒への支援活動の連携強化を行う。

北海道有朋高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科・事務情報科
生徒数：283 名

本校の目指す生徒像

- ・自ら伸ばせ 輝かせ
- ・心豊かに 気品あれ
- ・進取で強く しなやかに

本校の現状

多くの悩みを抱え、不登校傾向にある生徒に対して、校内委員会と各年次がスクールカウンセラーと連携しながら支援に努めている。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
- 2 外部専門機関との連携及び積極的な活用
- 3 北海道医療大学生によるレクリエーション活動や大学生カフェの実施
- 4 アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施と活用

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 スクールカウンセラーによるカウンセリングの充実

- ・生徒、保護者、関係教職員を対象としたカウンセリングを実施した。
- ・登校が難しい生徒に対しては、電話によるカウンセリングを実施した。
- ・スクールカウンセラーがカウンセリング内容を基に教職員へ指導助言した。

2 外部専門機関との連携及び積極的な活用

主に児童相談所や医療機関などとの情報共有により、家庭において課題を抱える生徒への対応・支援について充実を図った。

3 北海道医療大学生によるレクリエーション活動や大学生カフェの実施

大学生が企画したレクリエーションを年4回、カフェを年4回実施。新たな人間関係の形成とコミュニケーションスキルの向上を図った。

4 アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施と活用

「心と身体のチェックリスト」を長期休業明けに実施。特にストレスや不安を抱えている生徒をリストアップし、個別懇談や保護者を交えた懇談を実施した。

さらに、希望者についてはスクールカウンセラーへとつなぎ、見守り活動を継続した。

取組の成果等

○ 成果

- ・スクールカウンセラーのアドバイスにより、状況に応じて外部機関（児童相談所や医療機関等）へスムーズにつなぐことができた。
- ・本事業に係る長年の取組によって、生徒に寄り添った指導の充実や、相談体制の強化が徐々に図られ、生徒にとって相談しやすい環境が整ってきている。
- ・カウンセリングや校内委員会のサポートによる支援を受けた生徒が学校生活を意欲的に送ることができている。
- ・大学生との交流を通し、生徒個々のコミュニケーションスキルが向上してきた。

○ 課題

- ・電話によるカウンセリングを実施したが、生徒の様子をより詳細に把握するためにオンライン体制を構築する必要がある。
- ・アセスメントツールの適切な実施回数、実施時期を検討する必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・オンラインによる相談体制の充実。
- ・現在実施している「ほっと」や「ほっとプラス」を含めたアセスメントツールの精査。
- ・高大連携事業の更なる充実。

北海道蘭越高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：41名

本校の目指す生徒像

- 1 チャレンジ精神に富み、主体的に学び、行動する生徒
- 2 自然や郷土を愛し、地域や社会の発展に寄与する生徒
- 3 コミュニケーション能力に富み、他者との協調・協働を通して己を高める生徒

本校の現状

- ・素直な生徒が多いが、自己肯定感が低い生徒、自己表現が苦手な人間関係の構築に課題のある生徒が見られる。
- ・中学校までに不登校傾向があった生徒が各学年に複数在籍している。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによる自殺予防講話
- 2 生徒理解と心の変化や困り感等の早期把握・対応のための取組

取組の内容

○ 自殺予防教育の取組

1 スクールカウンセラーによる自殺予防講話

（講師：本校スクールカウンセラー 高杉ゆう子氏 7月・2月に実施）

「心が苦しい状態にある自分自身を理解の仕方と対応を学ぶこと」「他者との向き合い方について理解を深めることで、よりよい行動を選択できるようになること」を目的に、「しんどい心の乗り越え方～高校生のためのメンタルケア講座～」という題で講話をいただいた。

生徒の日常生活に関わる内容を中心に、実践的なスキルについて学ぶ機会になった。

※管内各学校・教育委員会から計8名がオンラインで参加した。

《生徒の感想》

「先生が教えてくれるのは、幸せになってほしいから」という言葉が一番心に残った。誰かが死にたいと思い、それを助けようとするのは難しいことだけど、みんながそれぞれ自分自身で自分を分かって、受け止めることができるようになると、命を救える方法や、人生をやめる人が減っていくのかなと思った。

2 生徒理解と心の変化や困り感等の早期把握・対応のための取組

(1) 健康観察・教育相談アンケートの実施

毎週、全校生徒を対象に「健康観察・教育相談アンケート」を実施し、生徒理解と心の変化や困り感等の早期把握につなげた。アンケート後、変化を把握した生徒に対して速やかに面談し、その結果を教職員間で情報共有するとともに、スクールカウンセラーに情報共有する資料に活用した。

(2) スクールカウンセラーによる指導助言

月1回程度、スクールカウンセラーが「健康観察・教育相談アンケート」等に基づいてカウンセリングを実施した。カウンセリングの内容を校内で共有し、本事業の実施等に活用した。

取組の成果等

○ 成果

自殺予防講話実施後のアンケートでは、「講話の実施により、自分の扱い方や心を落ち着かせる方法、言語化について学び、自分に向き合うことができた」と振り返る生徒が多く見られた。また、生徒自身が日常を振り返り、スムーズに新年度につなげることができるよう、2月に2回目の講話を実施した。

○ 課題

毎年様々な課題を持った生徒が入学するため、アセスメントツール等の効果的な活用方法について、教職員研修を一層充実させる必要がある。

○ 次年度に向けて

自殺予防講話の開催について管内の関係機関に案内したところ、オンライン等でも多くの方の参加があった。引き続き、児童生徒の学びの機会を管内でも共有するとともに、町内の小中学校と連携にも重点を置き、情報共有・支援の引継ぎ等を一層効果的に行えるようにしたい。

北海道追分高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：67名

本校の目指す生徒像

- ・自律的に行動し、実践力がある生徒
- ・豊かな感性を持ち、他者に寛容である生徒
- ・他者の意見を尊重し、自分の意見を表現できる生徒

本校の現状

- ・不登校経験者が多く、自己肯定感の育成に課題がある。
- ・他者の心情を推察することに不慣れな生徒が多く、対人関係の構築に課題がある。

本校の取組の特徴

- 1 体験的な活動を通じた、コミュニケーション能力の向上
- 2 気持ちを表出できる機会を増やす取組を通じた援助希求的態度の育成

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 体験的な活動を通じた、コミュニケーション能力の向上

- (1) 自己理解～コミュニケーションカードを用いて自己紹介を行うグループワークを行った。学年が上がるとともに自己分析を深めている様子が見られた。

【感想】

- ・私は自分から動くのが苦手だけど、グループ活動やみんなで何かに挑戦する時は積極的に動くことが大切だと実感した。
- ・まだ僕は自分の意見を言えないのでちゃんと克服したい。今日で自分の弱いところが分かったからその弱いところを直していきたい。
- ・普段は明るく悩みのないように見える人でも、実は周りを気にしていたり、人見知りだったり自分と変わらないと思った。

- (2) スクールカウンセラーによる集団カウンセリングを学年毎にテーマを決めて実施した。

【感想】

- ・人との関わり方と考え直せた。
- ・自分の性格の細かいところまで目を向けることができた。
- ・困った時には信頼できる人に相談しようと思った。

- (3) 地域連携の取組～年間9件のボランティアの依頼があり、計25名の生徒が参加した。

【感想】

- ・役に立てる事ができて、すごく良い気持ちになった。
- ・町内の方々と交流があり、楽しかった。

2 気持ちを表出できる機会を増やす取組を通じた援助希求的態度の育成

長期休業前後にアンケートを実施した。自由記載欄に自分の気持ちを表出している生徒が多く見られたことから、生徒サポート委員会で内容を確認してHR担任が面談や声掛けをしている。スクールカウンセラーの紹介は、お便りだけでなく、1年生には対面で紹介できる場を作り、相談しやすい関係づくりを行っている。紹介後すぐに相談を希望する生徒がいた。



【グループワークの様子】

取組の成果等

○ 成果

体験的な活動を継続することで、学年が上がるとともに、援助希求的態度を育成することができた。長期休業前のアンケート結果で、不安の強い生徒にはHR担任が面談等でサポートを行った。休み期間中気持ちの回復ができ、心の安定につながった。

○ 課題

グループ活動や席替えの場面では、現状維持を好む生徒がおり、新たな人間関係が構築されにくく、コミュニケーションスキルの向上に向けた支援を継続する必要がある。

○ 次年度に向けて

地域と連携しながら、学校行事やボランティア活動を通じて、コミュニケーションスキルを活かす場をつくり、経験を積めるようにしていく。

北海道鵒川高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：124 名

本校の目指す生徒像

一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。

本校の現状

対人関係が苦手な生徒、精神的に不安定な生徒が多く、学校生活に不安を抱え、支援やサポートが必要な生徒が多く入学してくる。

本校の取組の特徴

- 1 コミュニケーションスキルアップトレーニング（C S T）の取組
- 2 絵本セラピーの実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 コミュニケーションスキルアップトレーニング（C S T）の取組

- ・生徒指導部長やS C等による生徒サポート委員会を中心に、全学年に人間関係作りのためのC S Tの授業を実施した。特に1学年はクラス作りのための集団カウンセリングを年度初めに行った他、2学年では「自他理解と自立」、3学年では「自己主張」をテーマにして実施した。
- ・生徒からは、「一人ひとり考えが違うことが分かった」「相手を尊重して自分の意見を伝えることを考えることができた」などの感想があり、コミュニケーションの取り方を学ぶことができた。

2 絵本セラピーの実施

学年ごとに、絵本セラピストによる絵本セラピーを全学年で実施した。絵本を使用することで、他者の感情や考えを理解して受け入れる体験をしたり、自分の考えを表現したりした。また、自他を尊重して、予防的・開発的な視点に基づく人間関係の構築やコミュニケーション能力の育成を図った。

取組の成果等

○ 成果

- ・C S Tの実施や外部講師による絵本セラピーなどにより、コミュニケーションのポイントとなる「傾聴」や「アサーティブな伝え方」について考えたり、他者の気持ちを考えたりすることが、少しずつできるようになった。
- ・S Cによるアセスメントやカウンセリングを踏まえた教員への助言により、様々な特性を持つ生徒についての生徒理解を深めるとともに、生徒支援についての検討をすることができた。

○ 課題

本校は、対人関係が苦手な生徒が多く、人間関係のトラブルも多い。担任や教科担任、部活動顧問での連携に加え、S Cや関係機関との一層の連携が必要である。

○ 次年度に向けて

アセスメントツールの活用や校内研修の実施等により、生徒理解を深め、多様な生徒に適切な支援ができるように努める。また、教員間や関係機関との連携を密にし、様々な角度から生徒への支援をできるように努める。

北海道白老東高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：158名

本校の目指す生徒像

- ・主体的に学び、知識と教養を身に付ける生徒
- ・他者を尊重し、豊かな心をもつ生徒
- ・心身の健康を大切にし、活力ある生活を送る生徒

本校の現状

中学校段階で不登校を経験した生徒が年々増加しており、自己肯定感や対人関係に課題を抱える生徒がみられる。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラー（以下ＳＣ）と連携した取組
- 2 アセスメントツールを活用した心身の状態把握
- 3 アセスメントに基づいたＳＣによる指導助言

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 ＳＣと連携した取組

- ・ＳＣによる講話やグループワークを通して自己理解や他者理解を深めるとともに、円滑な人間関係の形成やコミュニケーション力の向上を図った。
- ・各学年の実態に応じ、自己理解、ストレスへの対処、性の多様性などをテーマに設定し、生徒が自らの考えや気持ちを見つめ直す機会とした。
生徒からは、相談することへの抵抗感の軽減や、他者との関わり方を前向きに捉える声が多く聞かれた。

2 アセスメントツールを活用した心身の状態把握

- ・「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」を学期の節目や長期休業前後に実施し、生徒の心身の状態を把握した。
- ・結果を担任・学年と共有し、面談や支援につなげるなど実践的な活用を行った。

3 アセスメントに基づいたＳＣによる指導助言

- ・「心と身体のチェック」等による生徒のアセスメントに基づき、ＳＣが教員に生徒への具体的な支援方法について指導助言等を行った。
- ・ＳＣによる指導助言等を踏まえ、継続的な見守りや今後の支援方針の検討につなげた。

取組の成果等

○ 成果

グループワークを通して、普段は関わりの少ない生徒同士でも、当初の緊張が徐々に和らぎ、会話や意見交換が活発になる様子が見られた。また、相談することの大切さや、ストレスへの対処の仕方について、体験的に理解を深める生徒が増えており、対人関係や自己理解に対する前向きな変化が見られた。

○ 課題

講話やプログラム実施後には、内容を意識したコミュニケーション行動が一時的に見られるものの、時間の経過とともに友人関係が不安定となる場面もあり、継続的な支援や働きかけの必要がある。また、支援がＳＣや一部の職員に偏りやすく、学校全体での共通理解や組織的な取組として十分に定着していない点も課題であることから、職員間で話し合いの機会を設け、組織的に取り組むことができるようにする必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・集団形成プログラムや自殺予防に関する講座について、生徒の実態や発達段階を踏まえながら、継続的に実施できるよう計画的に取り組む。
- ・アセスメントに基づいたＳＣによる指導助言を継続し、関係職員との連携を図りながら、早期対応・継続支援につなげる。
- ・アセスメントツールの活用方法や結果の読み取りについて、教職員研修を通して共有し、学校全体で生徒理解を深める体制づくりを進める。

北海道南茅部高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：17名

本校の目指す生徒像

- ・何事にも積極的に挑戦する生徒
- ・思いやりをもち、規律正しく生活ができる生徒
- ・健やかな心身・地域への誇りをもつ生徒

本校の現状

不登校を経験している生徒やコミュニケーションに苦手意識がある生徒が多く見られる。

本校の取組の特徴

- 1 全教職員による組織的な教育相談
- 2 スクールカウンセラーによる心理教育
- 3 スクールカウンセラーによる指導助言

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 全教職員による組織的な教育相談（年間3回）

年度初めに話してみたい教員を生徒に選択してもらい、各生徒に面接担当者を設定した。GW明けや長期休業明けの心が不安定になりやすい時期に面談を実施した。面談前には「アセス」や「心と身体のチェック」等の結果を全教職員で確認し、要支援生徒について担任や面談担当者とは情報共有を行った。

2 スクールカウンセラーによる心理教育（年間6回）

1学年の生徒を対象に、話すスキル・聞くスキル・人と関わるスキルの向上を目指した心理教育を実施した。また、グループワークを通して自己理解を深めたり、クラスメイトの良いところを伝え合うことで、仲間を相互に理解し合ったりする経験を重ねた。

3 スクールカウンセラーによる指導助言（年間5回）

「心と身体のチェック」等による生徒のアセスメントに基づき、スクールカウンセラーが教員への指導助言等を行った。



【心理教育の様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・教育相談を通して、生徒が相談しやすい環境をつくることができた。

〈生徒の声〉

「話したいけど自分から声をかけられない人には助かる。」

「考えがまとまり、相談前とのとらえ方が変わって良かった。」など

- ・スクールカウンセラーによるカウンセリングを受けた生徒は、スクールカウンセラーのアセスメントにより自分の今の状況を冷静に顧みることができ、前向きな行動変容が見られた。
- ・スクールカウンセラーによる心理教育では、円滑なコミュニケーションをとるためのスキルの向上や自己・他者理解を深めることができた。

○ 課題

スクールカウンセラーによる心理教育の意図を生徒たちが理解するのにやや時間がかかった。心理教育の意図を生徒へ丁寧に説明する時間を設ける必要がある。

○ 次年度に向けて

不登校を経験している生徒や悩みを抱える生徒が安心して学校生活を送ることができるように、生徒の実態に合わせて教職員による教育相談とスクールカウンセラーによる指導助言を継続していく。心理教育については、スクールカウンセラーと内容について検討していく。

北海道富良野高等学校

課程：全日制

学科：普通科・農業科・工業科・商業科

生徒数：462名

本校の目指す生徒像

- ・知性に富み、新しい時代を創造し続ける人
- ・郷土を愛し、地域・世界で貢献できる人
- ・豊かな心を養い、多様性を認め合う人

本校の現状

富良野高校と富良野緑峰高校の一括統合による環境の変化に伴う影響を踏まえ、教育相談体制の充実やコミュニケーション能力・ストレス対処能力の育成が必要

本校の取組の特徴

- 1 人間関係形成能力やコミュニケーション能力の向上のための実践及び学校設定教科「表現」の開設
- 2 外部人材を活用したストレス対処能力の育成を図る取組

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 人間関係形成能力やコミュニケーション能力の向上のための実践及び学校設定教科「表現」の開設

- ・多学科設置校として学科間の交流と入学後の人間関係づくりのため、演劇のプロ（民間講師（非常勤））による自己理解・人間関係に関するエクササイズを実施（1年次、4月）
- ・生徒の自己肯定感や人間関係形成能力、コミュニケーション能力の育成を図る取組として、地域の教育資源である演劇を生かし、演劇のプロ（民間講師（非常勤））による学校設定教科「表現」を開設
- ・2・3年次において、次のような学校設定科目を開設

身体表現（2単位、異年次履修）、コミュニケーション実践（2単位、異年次履修）、
コミュニケーション活用（2単位、3年次）、社会につながる演劇（2単位、異年次履修）

2 外部人材を活用したストレス対処能力の育成を図る取組

- ・外部講師活用したよる「ストレス対処」に関する講演を実施（永浦 拓 准教授（北海道教大学旭川校））
- ・年次別に置かれている状況に合わせたテーマを設定し、生徒の実態調査を踏まえたストレス対処の在り方を学習（1年次は高校入学の影響、2年次は一括統合による影響、3年次は卒業後の新生活の影響）
- ・他の生徒の対処方法や10秒呼吸法など、多様なコーピングの方法を習得



【外部講師による講演の様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・学校設定教科「表現」選択者が、1年間の授業の成果として生徒自身の体験談や、講師の書いた脚本を用いた劇を全校生徒の前で発表し、コミュニケーション能力等が向上した姿を披露することができた。
- ・ストレス対処能力の育成を図る取組により、ストレス対処能力等が向上し、生徒の自己指導能力の基盤を育成することができた。

○ 課題

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」を効果的に活用するため、分析結果を具体的な教育活動に反映させていく必要がある。
- ・本プログラムの自走化を図るため、外部講師に頼らないプログラムを開発する必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果を生かしたクラス経営・授業実践の蓄積。
- ・ストレス対処能力の育成や行動活性化の取組に関する授業プログラムの開発。

北海道枝幸高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：114名

本校の目指す生徒像

- ・志を強く持ち、主体的に学び考える力の育成
- ・対人基礎力を高め、仲間と協働し、課題を解決する力の育成
- ・ふるさとを学び、愛し、未来の地域創造に貢献する力の育成

本校の現状

友好的かつ素直で真面目な生徒が多いが、固定的な友人関係に悩み、新たな人間関係を構築する力やストレス対処法、援助希求の態度の育成が必要である。

本校の取組の特徴

- 1 各種アセスメントツールの活用と個別面談の実施
- 2 アプリによる「心の健康観察」の取組
- 3 スクールカウンセラーによる支援
- 4 外部講師による生徒向け講話と教員向け研修の実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 各種アセスメントツールの活用と個別面談の実施

- ・「心と身体チェック」や「アセス」等を実施し、結果を生徒にフィードバックした。
- ・アセスメントツールの結果を全教職員で共有し、ストレス度の高い生徒への面談等を実施した。
- ・スクールカウンセラーや教育相談室の利用を案内し、いつでも生活に困り感が出た場合の相談体制を周知した。

2 アプリによる「心の健康観察」の取組

アプリ「シャボテンログ」での健康観察を行い、入力後に気になる生徒の情報を確認し、生徒への面談等を実施した。

3 スクールカウンセラーによる支援

定期的なスクールカウンセラーの個別面談を実施した。

○ 自殺予防教育の取組

4 外部講師による生徒向け講話と教員向け研修の実施

- ・北海道医療大学心理学部臨床心理学科富家直明教授をお招きし、「思春期こころの健康づくり講座（心の健康教室）」と題して講演会を行い、SOSの出し方の講演、グループワーク等を行い、自己の状態に気づき、対応する能力を育成した。
- ・生徒向けの講演後に教員向けの研修を実施し、SOSの受け方等についてグループ討議を行い、指導助言をいただいた。



【外部講師の講演の様子】

取組の成果等

○ 成果

各種アセスメントツールやアプリを使った健康観察を実施し、結果を生徒にフィードバックすることで、生徒自身が自己の状態に気づき、対応する能力が育成された。

○ 課題

教員のカウンセリング能力を一層向上させるため、各種アセスメントの活用、面談時の声のかけ方について、引き続き教員研修が必要である。

○ 次年度に向けて

アセスメントツールのより効果的な活用を通して生徒理解を深め、より適切な生徒支援ができる方法を模索していく。また、いのちの大切さなどを含めた自殺予防教育の充実を図っていく。

北海道礼文高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：43名

本校の目指す生徒像

- ・自ら学び、創造する生徒を育成する
- ・自ら考え、実践する生徒を育成する
- ・自ら鍛え、思いやりのある生徒を育成する

本校の現状

全国各地から入学する生徒が約半数を占める。それ故、多様な生徒の集団であり、人間関係の早期構築が必要である。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーを活用した取組 ～ 集団カウンセリング
- 2 「心の健康観察」の取組

取組の内容

○ 人間関係を構築する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 スクールカウンセラーを活用した取組 ～ 集団カウンセリング

<テーマ>

- (1) 「ダイバーシティとインクルージョン」
- (2) 「多様性についていろいろな視点で考えてみましょう」
- (3) 「リフレーミング」

2 「心の健康観察」の取組

- (1) アプリ「シャボテンログ」を用いて、生徒の心や身体の不調に対して、「気づき」や「変化」を見える化した。
- (2) アセスメントツール「心と身体のチェック」を用いて、長期休業前後の生徒の心の変化を把握した。

※その他にも次のような取組を実施した

- ・個人面談・健康面談・進路面談など全校生徒を対象にしたカウンセリング
- ・教育相談だよりの発行



【集団カウンセリングの様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・教職員の粘り強い対話等により、生徒の困り感などを引き出し、全教職員で共有することができた。
- ・「Q-U」、「シャボテンログ」、「心と身体のチェック」などを活用することにより、生徒の特性を把握し、迅速に対応することができた。

○ 課題

- ・一人ひとりの生徒がさらに前向きに学校生活を送ることができるよう、学生寮などの外部機関とも一層連携し、情報の共有を行うことが必要である。
- ・教職員の負担軽減のため、業務を今まで以上に効率的に実施するシステムを構築する必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・アセスメントツールをさらに活用できるよう、研修を重ねる。
- ・本校で行っている様々な生徒支援の取組がやや断続的になっているので、各取組を効果的に連動させて進めていく。

北海道雄武高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：53名

本校の目指す生徒像

スクール・ポリシーに示す育成を目指す資質・能力を身に付けた生徒

- 1 社会生活を営むための基礎的な力
- 2 知識を活用し、課題を解決する力
- 3 自ら自身を持ち、他人を認め、協力する事ができる力

本校の現状

固定的な友人関係や人間関係に悩み、自尊感情が低い生徒が多く見られることから、コミュニケーションスキルを身に付けさせ、自己肯定感を高める活動を通じて、良好な人間関係づくりを目指す。

本校の取組の特徴

- 1 ピア・サポート活動の実施
- 2 スクールカウンセラーによる教育相談活動の実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 ピア・サポート活動の実施

(1) 学年間ピア・サポート

【1・2・3年生】【日時 5月～12月】

1年生はピア・サポート活動（計6回 仲間理解、話の聞き方、問題解決能力、効果的なストローク、非言語コミュニケーション、アサーション）にて人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指す活動を実施し、2、3年生はピア・サポーターとして事前に教師からその役割や活動の進め方について学び、支援計画を各活動グループで作成、1年生のピア・サポート活動の支援を行った。

(2) 学校外へのピア・サポート活動

【1年生：雄武小学校・沢木小学校（児童）】【日時 11月】

交流活動の中で、これまでのピア・サポート活動で培ったスキルやノウハウを基に、協調性の大切さや思いやりの心を養うことを目標に、「ドッジボール」や「しっぽ鬼」などのゲームを行った。

2 スクールカウンセラーによる教育相談活動の実施【全校生徒】【全8回】

子ども理解支援ツール「ほっと」の結果等によるアセスメントに基づき、生徒へのカウンセリングや教師への助言・援助（コンサルテーション）を実施した。

取組の成果等

○ 成果

「ほっと」の結果では、本校生徒のソーシャルスキルはほとんどの項目で全道平均を上回った。特に3学年の平均値では、「あいさつをする（礼儀）」、「相手を思いやる（配慮）」、「仲間に加わる（参加）」、「ルールを守る（遵守）」の数値が高く、ピア・サポート活動等の成果であると考えられる。また、生徒の思考・判断・表現力や主体性などの資質・能力を評価するツール「Ai Grow」による、生徒の資質・能力の数値化（可視化）においても、「主体性」「協働性」の数値が中央値を超える生徒が、各学年でクラスの半数を超えた。生徒が自己理解を深め、学校生活をより主体的に取り組む姿勢を育むことができた。

○ 課題

本事業の取組の成果が「ほっと」や「Ai Grow」の結果に反映したことから、結果の分析を進めて、一層効果的な取組となるよう改善できる箇所がないか検討する必要がある。

○ 次年度に向けて

年度末反省を踏まえ、学校外へのピア・サポート活動のより一層の充実を図ったり、「ほっと」、「Ai Grow」の効果的な活用の方法を検討したりする。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

(平成25年5月17日学校教育局長決定)
(平成28年5月20日一部改正)
(平成30年4月6日一部改正)
(平成31年4月19日一部改正)
(令和2年4月10日一部改正)
(令和3年5月6日一部改正)
(令和5年4月21日一部改正)
(令和6年4月11日一部改正)
(令和7年4月11日一部改正)

1 趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業の実施主体

- (1) 本事業は、北海道教育委員会（以下「委員会」という。）が実施する。
- (2) 本事業は、文部科学省の委託を受けて実施することができる。

3 事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア 集団カウンセリングの実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的に集団カウンセリングを実施する。

イ 自殺予防教育の取組の実施

実施校は、「自殺予防教育プログラム」を積極的に活用し、計画的に自殺予防教育の取組を実施する。

ウ アプリによる「心の健康観察」の実施

実施校は、アプリによる「心の健康観察」を活用し、教職員が生徒の心や体調の変化を把握し、心のSOSの早期発見につなげる取組を実施する。

エ 外部人材を活用した取組の実施

(ア) スクールカウンセラーによる支援

実施校は、「心と身体のチェック」等による生徒のアセスメントに基づき、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び本事業の実施のための指導助言、教員研修等に、積極的にスクールカウンセラーを活用する。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

(イ) 北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員（以下「支援チーム員」という。）の活用

実施校は、生徒指導上の諸課題の解決に向けた取組の教員研修等に、積極的に支援チーム員を活用する。

オ 成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ア)から(オ)の項目により検証する。

(ア) 子ども理解支援ツール「ほっと」、アセスメントツール「心と身体のチェック」等を用いた客観的な指標に基づく評価

実施校は、「ほっと」等による調査を複数回実施し、上記ア、イに掲げる取組の成果を検証する。

(イ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率の変化

(ウ) その他の生徒の状況

・上記ア、イの取組における生徒の感想

・上記ア、イの取組における生徒の活動状況の観察

(エ) 外部人材の活用状況

(オ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

カ 学校プログラム（成果のまとめ）の作成

実施校は、上記ア～オの実施状況、成果や課題を踏まえ、他校の参考となるよう、実施時期や内容、参考資料等を取りまとめた学校プログラム（成果のまとめ）を作成する。

(2) 委員会の取組

ア 運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ 集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ 取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ 拠点型オンラインカウンセリングによる支援

委員会は、不登校生徒を含めたオンラインカウンセリングが必要と考えられる生徒及びその保護者に対して、学校等とオンラインカウンセリングの拠点をオンラインでつなぐことにより支援する。

4 事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、事業終了後においても、学校独自でプログラムを継続的に実施することを想定した計画の策定及び検証を行うこと。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得のほか、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 高校1年生に重点を置いて、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。

また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。

(4) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。

(5) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。

ア スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。

イ 予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。

ウ スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「北海道公立学校スクールカウンセラー（非常勤）設置要綱」（令和7年3月31日学校教育局長決定）によること。

エ 上記3(2)のエにある拠点型オンラインカウンセリングによる支援については、令和7年度スクールカウンセラー活用事業実施要領によること。

(6) 上記3(1)のウにあるアプリによる「心の健康観察」については、委員会がスタンドバイ株式

会社と契約することにより、スタンドバイ株式会社が提供する「シャボテンログ」を無料で利用することができる。

- (7) 支援チーム員の派遣については、「北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム実施要項（令和2年3月31日学校教育局長一部改正）によること。

5 実施期間

原則として当該年度の年度末までとする。

ただし、当該年度を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6 事業の実施手続

- (1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式1）及び所要経費計画書（別記様式2）を添付し、委員会に申請する。
- (2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。
- (3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7 事業の報告

- (1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の指定された期日までに、委員会に提出すること。
- (2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかにするものとし、事業を実施した翌年度から5年間保存すること。

8 その他

- (1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。
- (2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附 則

この要項は、平成25年5月17日から施行する。

この要項は、平成28年5月20日から施行する。

この要項は、平成30年4月6日から施行する。

この要項は、平成31年4月19日から施行する。

この要項は、令和2年4月10日から施行する。

この要項は、令和3年5月6日から施行する。

この要項は、令和5年4月21日から施行する。

この要項は、令和6年4月11日から施行する。

この要項は、令和7年4月11日から施行する。